オスマン王家の始祖としてのヤペテとエサウ

——古典期オスマン朝における系譜意識の一側面——

The Biblical Origin of the Ottoman Dynasty
in the 15th and 16th Century小笠原 弘 幸^{*}
OGASAWARA Hiroyuki

ABSTRACT Almost all the Ottoman historians of the 15th century claimed that the Ottoman dynasty stemmed from Japheth, the son of Noah. Japheth was generally regarded as the ancestor of the Turks in Muslim historiography. That is why the Ottoman historians accepted Japheth as their ancestor, although the descendents of Japheth were less respected than those of Shem, from whom the Prophets originated.

In the second half of the 15th century, however, Oruç and *Giese Anonymous* quoted a hadith that “the descendents of Issac will conquer Constantinople” and mentioned that the Ottoman Sultans came from Issac, who was a descendent of Shem.

In 1480's, *Saltuk-nâme* and *Oxford Anonymous* claimed Esau, who was a son of Issac and the brother of Jacob, to be the Ottoman ancestor. The authors of these books narrated that the sons of Esau would be a king because Issac prayed to God for Esau. It appears that this account was based on the former Muslim historians like Mas'ūdī and also that Esau was more respected than Japheth. Besides, Esau was also regarded as the ancestor of the kings of Rum. Though “Rum” originally signified Roma, the Ottoman Sultans were the kings of Rum at that time. That might have helped the Ottoman historians to accept Esau as the ancestor of the Ottoman dynasty.

During the late reign of Bayezit II, three historians, Rûhî, Bitlîsî and Kemâlpâşazâde strongly claimed that Esau was the ancestor of the Ottoman dynasty. Though they also briefly mentioned Japheth, they considered the Esau origin more important. The higher authority of Esau made the

* 日本学術振興会特別研究員

Research Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science

Ottoman historians of this period accept Esau as the ancestor. Nevertheless, after the reign of Bayezit II, the Ottoman historians accepted the Japheth origin again, because Japheth was “the authentic ancestor” according to the Islamic tradition. The changes in the Biblical origin of the Ottoman dynasty might reflect the development in the identification and legitimization of the Ottomans.

はじめに

ユダヤ教徒、キリスト教徒そしてムスリムには、地上に広がる人類はみなノア Nûh の三人の息子—セム Sâm, ハム Hâm, ヤペテ Yâfes—の子孫とする伝承が存在する。彼らの歴史観のいわば「始原」のひとつといえるこの伝承は、旧約聖書の記述に淵源を持ち、イスラーム世界の歴史家達にも共有されている⁽¹⁾（以下、本稿ではこれを「旧約聖書・イスラーム伝承」と呼ぶ）。この伝承では一般に、セムはユダヤ人やアラブ人、ハムは黒人、ヤペテはテュルク系の人々などの祖先として受け入れられている⁽²⁾。

イスラーム国家として後発であるテュルク・モンゴル系ムスリム諸王朝は、自分達の系譜をこうした「旧約聖書・イスラーム伝承」に起源を持つ系譜に結びつけようと試みており⁽³⁾、そこでは諸王家の系譜は「定説」に準じてヤペテにつながられた。同じくテュルク・モンゴル系ムスリム諸王朝の一つに数えられるオスマン朝においても、基本的にはこうした諸王朝と同様の系譜が語られていたが、独自の特徴も存在した。15世紀後半から16世紀初頭にかけて、オスマン朝の一部の史家は、エサウ 'Ays('Îs) をオスマン王家の始祖として主張したのである。エサウとは、ノアの息子セムの子孫で、アブラハム Ībrâhîm の息子であるイサク Īshâk の息子である（末尾のノアからエサウまでの系図参照）。

何故にこれらの史家は、ムスリム史家に共有される「定説」に依拠したテュルク族の始祖たるヤペテではなく、「破格」というべきエサウを王家の始祖に求めたのか。このオスマン王家始祖エサウ説については、オスマン王家の様々な系譜意識を扱ったフレミング、コンスタンティノーブル伝承を扱ったイエラシモスが、それぞれ研究の一節を割いて取り扱っている。フレミングの研究は、始祖エサウ説に言及した諸史書を紹介した先駆的なものである⁽⁴⁾。しかし数頁しか始祖エサウ説について割いていないこともあり、各史書の内容分析にはなお

検討の余地を残す。イエラシモスは、「コンスタンティノープルを征服する者はイサクの子孫である」というハディースに由来する記述が『オルチ史』において語られているのを指摘、これを始祖エサウ説登場の主要な原因とした。⁽⁵⁾この説と神秘主義教団との関わりなど、イエラシモスの指摘には重要なものがある。但し本稿の検討から分かるとおり、このハディースは始祖エサウ説成立の決定的な要因とはいえない。

以上の状況を踏まえ、本稿では目的を二点設定する。まず第一点目は、始祖ヤペテ説と始祖エサウ説をめぐる様々な記述が、オスマン朝に先行するムスリム歴史叙述といかなる関わりを持つかを検討することである。そして第二点目は、両説の主張が時代によってどのように変化したかを明らかにし、その変化をオスマン朝の経験した歴史的文脈の中に位置づけることである。この王家の系譜にまつわる問題は、オスマン王家の正統性の主張と密接に結びついている。近年のオスマン朝研究では、王権の正統性のあり方が重要な研究対象として注目されつつあり、⁽⁶⁾本稿もその動向に連なるものである。

本稿の対象とする時代は、オスマン朝において歴史叙述が始まる15世紀初頭から、オスマン朝の前期あるいは古典期の終わりと見なされる16世紀末までとする。⁽⁷⁾

I. 始祖ヤペテ説：王家の「古い」始祖（15世紀）

本章で取りあげるのは、オスマン王家始祖ヤペテ説である。旧約聖書によれば、人類の始祖アダムの十代後の子孫であるノアには三人の息子がいた。セムとハム、そしてヤペテである。大洪水後の人類は、全てこの三人の息子の子孫だとされる（創 10：1-32）。クルアーンの中でヤペテの名は言及されないが、上記の旧約聖書で語られる逸話は類似した形でムスリムの間にも伝わっており、⁽⁸⁾彼の子孫がその後全世界に散らばったという説も踏襲されている。

1. 始祖ヤペテ説の主張

オスマン朝における歴史叙述は、15世紀初頭をもって始まる。現存する最古の歴史叙述であるアフメディー『アレクサンドロスの書』（1410年）は、当初ゲルミヤン君侯国で著された書であったためかオスマン朝の系譜に関する関心が薄く、「旧約聖書・イスラーム伝承」起源に限らず、オスマンの父エルトゥール

ルより古い系譜情報は一切記されていない。しかし、当初からオスマン朝のもとで著述されたものとしては現存する最古の作品といえるヤズジュオール・アリー『セルジュク王家史』(1424年)においては、オスマン王家がその出自とするテュルク系オグズ族が、ヤペテ裔であると述べられている (Yazıcıoğlu 'Ali, *Ta'rih*, 4b)。これがオスマン朝の歴史叙述における始祖ヤペテ説の端緒である。またオスマン朝史を扱った史書の冒頭にしばしば記されるオスマン王家の王統譜⁽⁹⁾でも、その殆どが始祖ヤペテ説を採用している (例えば Şükrullâh, *Behcet*, 158b)。

本稿が対象にしている15世紀の史家15名のうち「旧約聖書・イスラーム伝承」に関わる系譜に触れている史家は11名であるが、始祖ヤペテ説のみを採用している史家はそのうち8名を数える ([表1]「始祖ヤペテ説」欄)。オスマン王家の始祖がヤペテであるということは、15世紀を通じて広く受け入れられていたといつてよからう。

既に触れた様に、テュルク族をヤペテの子孫とする考えは古くから存在した。イスラーム世界において、この説はほぼ全ての史書で採用されており ([表2]「テュルク族の始祖」欄)、これはムスリムの歴史観における「定説」と見なし⁽¹⁰⁾て良い。オスマン王家の始祖がヤペテに求められるのも、こうしたテュルク族をヤペテ裔とする説に由来している。

2. ヤペテ裔の位置づけ

i) オスマン朝以外で著された歴史叙述における位置づけ

それでは、そのヤペテ裔はどのように評価されているのか。まずオスマン朝以外で著された史料における記述を確認すると、アラビア語史料と、ペルシア語・テュルク語史料で明瞭な傾向の違いがあるのを見て取れる。アラビア語の歴史書でヤペテ裔についての評価を記す最も古い史料であるタバリー『諸使徒と諸王の歴史』(923年以前成立)は、次の説を伝えている。

セムは、アラブ、ファールス、そしてルームを^な生した。彼らの全ては良き者であった。ヤペテは、テュルク、スラヴ、ゴグとマゴグを生した。彼らに良き者はいなかった (Ṭabarī, *Ta'rih*, Vol. 1, 223)。

ここでは、明確にヤペテ裔がセム裔に比して劣ったものである、という評価が表明されている。セム裔は諸預言者が属する家系であり、その権威は高かつ

た。タバリーや他のアラビア語史書が伝えるヤペテ裔評価は負のものだけではないが、全体としてセム裔よりも劣った存在として見なされているのは間違いない。⁽¹¹⁾

アラビア語史料に対し、ペルシア語・テュルク語史料のヤペテ裔についての評価は異なっている。これらの顕著な特徴は、ヤペテの息子テュルク（ここでのテュルクは人名であり、テュルク族の名祖として位置づけられている）を賞讃している点である（[表2]「ヤペテと子孫の評価」欄参照）。例えば、最初の例であるペルシア語世界史書『史話要説』（Anon., *Mujmal*, 99-100）においてテュルクは、礼節 *adab* を備えかつ知性 *‘aql* ある人物とされている。ヤペテの子テュルクへの高い評価は、これらの史書を著した史家がほぼ全員、ヤペテ裔とされるテュルク・モンゴル系ムスリム諸王朝で史筆を取っていたという事情が影響していたと思われる。これらの史家は、セム裔よりも劣った存在とされているヤペテ裔の権威を高めるために、ヤペテの子テュルクを直接賞讃するという方法を取ったのであろう。但し、ラシードゥッディーン『集史』など、ヤペテ裔の系譜中に個人名としての「テュルク」が存在しない史料もあり（宇野『集史』の構成、46）、この場合は当然テュルクへの賞讃は行われない。

ii) オスマン朝で著された歴史叙述における位置づけ

それでは、オスマン朝の史家達はヤペテ裔をどのように評価しているのか。オスマン王家の始祖をヤペテとする殆どの史書は、王統譜中でヤペテの名前に触れるだけで、ヤペテ裔についての評価を行っていない。また世界史の預言者伝の部分でヤペテについて記述しているシュクルッラー『諸史の光喜』（1459年）も、ヤペテ裔に対する評価は特に記していない（Şükrullâh, *Behcet*, 33a）。このように、単なるヤペテという名前の言及に終わり、その評価については特に記さないというのが、始祖ヤペテ説を唱える史家の傾向である。オスマン王家をヤペテ裔とするオスマン朝の歴史家にとって、アラビア語史料の幾つかに見られるヤペテ裔への否定的評価は採用し難いものだったと思われる。またオスマン朝もテュルク・モンゴル系ムスリム諸王朝の一つであるが、ペルシア語・テュルク語史料に見られる、ヤペテの子テュルクを賞讃するという方法も採用されなかった。そもそもオスマン王家の祖先としては、王統譜にも本文にも、個人名としての「テュルク」を挙げる史料は存在しない。⁽¹²⁾ そのため、オスマン朝で著された史書においてはテュルクという人物を賞讃する記述が採用されなか

ったと考えられる。

オスマン朝で著された史書における始祖ヤペテ説の主張は、ヤペテ裔についての評価を全く含まないものであったと結論づけられよう。

II. 始祖エサウ説：王家の「新しい」始祖（15世紀後半～16世紀初頭）

前章で確認したのは、15世紀のオスマン朝で著された殆どの史書において、オスマン王家がヤペテ裔であるとされていたことであった。イスラーム世界における歴史叙述の「定説」に忠実である限り、オスマン王家はヤペテの子孫であらざるを得ない。しかしオスマン朝では15世紀後半以降、王家の出自をセム裔に変更するという、「定説」を大きく逸脱した主張が登場した。それが始祖エサウ説である。

旧約聖書によれば、エサウは、アブラハムの息子であるイサクの子であり、ヤコブを双子の兄弟とする。エサウは長じて獵師となり、父イサクに愛された。しかしイサクが彼に祝福を与えようとしたとき、ヤコブの奸計によって祝福はヤコブに与えられることになった。後で気が付いたイサクは、ヤコブに与えた祝福とは別の、小さな祝福をエサウに与えたが、エサウの怒りは収まらなかった。ヤコブはエサウを恐れ逃げるが、最終的に両者は和解に至る（創 27：1-45, 33：1-17）。和解後エサウは死海南方に位置するセイルの地に移住し、エドム人の祖となった。後のユダヤ教徒の間では、エドム人はローマ人と同一視され⁽¹³⁾る。クルアーンに彼の名は現れないが、イスラーム世界の史書におけるエサウの説話は、基本的に旧約聖書の筋に沿った形で語られている。

1. 「イサクの父の息子達」説：始祖エサウ説の萌芽（15世紀後半）

始祖エサウ説登場の原因として先行研究で重視されるのが（Yerasimos, *foundation*, 198），オルチ『オルチ史』のオックスフォード写本において伝えられている説である。著者の詳細な経歴と本書の成立年はともに不明である。一部はメフメト2世時代（r. 1444-1446, 1451-1481）に執筆されたが、最終的にはバヤズィト2世時代（r. 1481-1512）に成立したと考えられている⁽¹⁴⁾。オルチは次のように述べる。

⁽¹⁵⁾
マサービーフの注釈でいわれるのは、『呪われし偽預言者 Deccâl 出現前に、[コンスタンティノープルは] ひとたび剣でもって奪われん。復活の日

が近いとき、イサクの父の息子達 Ebû İshâk oğlanları から救世主 mehdî の名を持つ人物が現れ進み、アッラーは偉大なりといて獲得せん』、ということである。最初に剣でもって獲得したのは、当代のイスラームとムスリムの帝王 pâdişâh, 異教徒と異端者達を打ち斃す者、スレイマン・シャー [の息子] エルトゥールルの息子オスマンの息子オルハンの息子ムラトの息子バヤズィトの息子メフメトの息子ムラトの息子、スルタン・メフメト—彼に神の助力あれ—⁽¹⁶⁾ [である]。

ここで注目されるのは、コンスタンティノープルを征服する者は「イサクの父の息子達」であり、それはすなわちオスマン王家である、と記述されている点である（本稿ではこれを「イサクの父の息子達」説と呼ぶこととする）。この記述の原型となったのは、六大ハディース集のひとつ、ムスリム（817/21-75）編『真正集』に含まれるハディースである（Yerasimos, *foundation*, 189）。

アッラーの御使いは、⁽¹⁷⁾「一方は陸地で他方は海に接している町について、なにか聞いたことがあるか」といわれた。人々が「いいえ、ありません」と答えると、御使いは「“最後の時”が近づく頃には、七万のイサクの民 banū Ishāq⁽¹⁸⁾ がここを攻撃する。彼らはここに上陸すると、武器を手にして戦うことも矢を射込むこともせず、ただ、アッラーの他に神はない！アッラーは偉大なり！と叫ぶだけであるが、それによって町の一角は崩れ落ちるであろう⁽¹⁹⁾」といわれた。

ハディースでは、コンスタンティノープルを征服する者は「イサクの民」であるとされている。「イサクの民」—イサクの息子であるエサウもこれに含まれる—という語は、本来はアラブ人またはイラン人のことを指していたという（Flemming, “Political,” 135; Yerasimos, *foundation*, 190）。しかし現実にはコンスタンティノープルを征服したのはオスマン朝であった。イエラシモスは、現実にはコンスタンティノープル征服を果たしたオスマン王家が、このハディースにある「イサクの民」と自らを重ね合わせたとして、これが始祖エサウ説登場の最大の原因であったとする（Yerasimos, *foundation*, 198）。

但し、『オルチ史』もハディースも、エサウについては明確な形では言及していない。「イサクの父の息子達」説がオスマン王家始祖エサウ説成立の契機となった可能性は無視し得ないが、この段階では始祖エサウ説はまだ十分な形をなしていなかったと見なすべきである。

それでは、「イサクの父の息子達」説は、どのような人々によって主張されたのか。イエラシモスはハディースの「イサクの民（バヌー・イスハーク）」という語が、『オルチ史』において「イサクの父（アブー・イスハーク）」と変更されている点に着目し、当時オスマン朝の聖戦（ガザー）、そしてコンスタンティノーブル征服に多数の門徒が参加していたイスハーキー教団（開祖アブー・イスハーク⁽²⁰⁾）の影響があると論じた（Yerasimos, *foundation*, 193-194⁽²¹⁾）。コンスタンティノーブル攻略戦には、一説には7万人もの同教団の門徒が参加していたと言われており（この「7万」という数字は、先のハディースに由来する誇大な数であろうが）、その影響力は少なくなかったであろう。イエラシモスの見解を敷衍すると、始祖エサウ説の萌芽であった可能性がある、オスマン王家が「イサクの父の息子達」であるとする説は、メフメト2世によるコンスタンティノーブル征服を契機とし、『真正集』のハディースをもととしてイスハーキー教団の人々によって主張されたものと見なすことができよう。

2. 始祖エサウ説（1480年代）

i) 始祖エサウ説の主張

始祖エサウ説に初めて言及したのは、メフメト2世の皇子ジェムの命を受けたエブールヘイル・ルーミーによって1480年頃に編纂された『サルトゥクの書』である。本書はルメリで活躍したテュルク族の伝説的な英雄サル・サルトゥクの事績を記した書である。本書では、ルメリの地に赴いたオスマンについて、当地の住人が次のように語ったとされている。

おお、部族の者よ！この若者〔オスマン〕は、帝王の息子である。アブラハム―彼に神の平安あれ―の息子イサクの民であり、これをエサウという。〔オスマンは〕この血筋 nesil である。三人の預言者がこの血筋に繁栄の祈りを行った。ひとりには預言者アブラハム、二人目は預言者イサク、三人目は最後の預言者ムハンマド・ムスタファである―彼に神の平穏と平安あれ。そして世界に現れた帝王達は、この血筋からであった。将来この若者に神はスルタン位を与え、この子孫 zürriyet と血筋は偉大なる ulu 帝王⁽²²⁾となろう。

ここでは、オスマンがエサウの血筋であることが主張される。さらに、エサウの血筋はアブラハム、イサク、ムハンマドによって祝福されたこと、そして

その子孫が帝王となると定められたことが述べられている。

『サルトゥクの書』の次に、始祖エサウ説をより十分な質量でもって伝えたのは、著者不明のオスマン朝史『オックスフォード写本無名年代記』(1480年代成立)である。本書の序文で著者は、執筆の目的としてトルコ語でオスマン朝史を編纂することを挙げ、本書を宮廷に献呈して評価を得ることを望んでいる(Anon., *Tevârîh*, 369)。本書冒頭では王家の起源について多くの紙幅が割かれており、著者が王家の起源に並々ならぬ関心を抱いていたことが窺われる。本書の写本は一点しか伝存していないが、ネシュリーやルーヒーが本書を利用したことが明らかとなっており、この史書が伝える内容は当時よく知られていたと見なすことができる。本史料では、序文に続いてオスマン王家の始祖伝承が語られるが、その際まずエサウにまつわる逸話が記述されている。

イサクには、エサウとヤコブの二人の息子がいた。イサクはエサウを気に入り彼に祝福を与えようとするが、ヤコブはエサウになりすましてイサクからの祝福を受けた。そのため、預言者はヤコブの血筋から現れることとなった。エサウは騙されたことを知り怒るが、イサクはエサウのためにも祈願した。その祈願の内容は、次のように伝えられている。

…だが、おまえ[エサウ]のためにもまた祈願 du‘â しよう。子孫 evlâd と家系 ensâb は裕福となり、高められて栄誉があるように」といって、手を取り[イサクが]言うには、「神の力の完全性のために、[将来]現れるであろう多くの帝王達、ベイ達、そして英雄達 pehlevânlar は、この子孫から現れるように。

エサウは、イサクによる祈願をなお不満としてヤコブと争うが、最終的に両者は和解し、エサウはトルキスタン⁽²³⁾に移住することを決めた。この後、記述はエサウの子孫であるオスマン朝の祖先についての伝承や王統譜へと繋がる(Anon., *Tevârîh*, 372-375)。王統譜の最後に、始祖ヤベテ説についても簡単に言及されているが、エサウについての伝承が長く語られていることから、著者が始祖エサウ説をより重視しているのは明白である。

『サルトゥクの書』と『オックスフォード写本無名年代記』の伝える始祖エサウ説が、先に見た「イサクの父の息子達」説とは全く異なる構造を持っていることは直ちに理解されよう。この両史料では、コンスタンティノーブル征服にまつわるハディースに由来する内容は全く言及されず、またオスマン王家が

「イサクの父の息子達」ではなく「エサウ」の子孫であると明確に述べられているのである。

ii) 始祖エサウ説の由来と権威

『サルトゥクの書』と『オックスフォード写本無名年代記』の記述で注目すべきは、どちらの史料においても、エサウの子孫は王となる存在である、と主張されている点である。これと同様の主張についてはフレミングが言及しているが、⁽²⁴⁾その由来については指摘していない。この記述の由来を理解するには、オスマン朝に先行するムスリム歴史叙述の文脈を参照しなくてはならない。本稿が対象とした史書では、古くはマスウーディー『黄金の牧場』(956年以前成立)が、イサクは、ヤコブの子孫には預言者性、エサウの子孫には王権があるよう祈願した、という説を伝えている。

「イサクは」ヤコブのために、彼の子孫に、彼の同朋に対する指導権 *riyāsa*, そして預言者性 *nubūwa* があるよう祈願した。またエサウのために、彼の子孫に、王権 *mulk* があるよう祈願した (Maḡoudi, *prairies*, Vol. 1, 88)。

マスウーディー以外には、オスマン朝と同時代人であるミールホーンド (Mīr-Khwānd, *Rawḍat*, Vol. 1, 177) とホーンデミール (Khwānd-Amīr, *Ta'rikh*, Vol. 1, 59) が同様の記述を残している。またタバリー (Ṭabarī, *Ta'rikh*, Vol. 1, 359) とスィフト (Sibt, *Mir'āt*, 314) は、エサウ裔が他の者に支配されることはない、とイサクが祈ったとしており、エサウ裔が王となるとする説との関連性が窺える。⁽²⁵⁾

すなわち、『サルトゥクの書』と『オックスフォード写本無名年代記』にみられる「エサウの子孫は王となる」という説は、オスマン朝に先行する歴史叙述において、エサウ裔が王となるとされていることを受けて記されたものであった。ヤペテ裔と、セム裔であるエサウの子孫とを比較すると、ヤペテ裔がセム裔よりも劣った存在と見られていたのに対し、エサウの子孫はセム裔であるのみならず、王位が約束されるという形でより高い権威を保持していたのである。

イサクによる祈願とは異なる文脈でも、エサウの子孫が王位に就いたという説は、オスマン朝に先行するイスラーム世界の歴史書において幾つも伝えられている。例えばエサウの子孫は、ルームの帝王 *pādishāh* (Shabānkāra'i, *Majma'*, Vol. 1, 195), アジャムの帝王 (Jūzjānī, *Ṭabaqāt*, 28), さらにカエサル (Rashīd

al-Dīn, *Jāmī*, 5a) であるとされている。また、エサウはエチオピアの王女と結婚してその地の王となった、という伝承も存在する (*Kisā'i, Qiṣaṣ*, 154)。この中で注目すべきは、エサウの子孫が「ルームの帝王」である、あるいは「カエサル」であるとする説である。「ルーム」の語は、もともと「ローマ」を指していたが、アナトリアを指す地名としても用いられた。「カエサル」とはいうまでもなく、ローマ共和国末期の政治家ユリウス・カエサルの名から取られた称号である。オスマン朝の君主は、バヤズィト 1 世 (r. 1389-1402) の時代から「ルームのスルタン」を称していたが、⁽²⁶⁾ コンスタンティノープル征服後には「カエサル」の称号も用いるようになった。⁽²⁷⁾ この時代、「ルームの帝王」あるいは「カエサル」であるのはまさしくオスマン朝の君主であった。⁽²⁸⁾ その自意識と、エサウの子孫はルームの帝王やカエサルであるとする説との結びつきが、始祖エサウ説成立の一つの原因をなしたと思われる。実際に16世紀初頭の史家ビトリシーは、オスマン王家をイサクの民（エサウの子孫もこれに含まれる）とした一節で、スルタンを形容する際に「カエサル」の語句を繰り返し用いている (*Bitlīsī, Heşt* 49a-49b)。

以上、始祖エサウ説を構成する内容のうち、最も特徴的な点であるエサウの子孫が王となるとする記述が、オスマン朝に先行するムスリム歴史叙述に原型を持つことを指摘した。本来テュルク系であるオスマン王家の始祖を、ヤペテではなくエサウにすることそのものは「破格」であるが、その内容についていえば完全な創作ではないのである。

この始祖エサウ説が何故この時期に、誰によって唱えられたのかに明確な答えを与えることは難しい。『オックスフォード写本無名年代記』は、宮廷に献じて評価を得るという目的のもと執筆されており、王家の気に入る内容が選ばれたと見なしうる。『サルトゥクの書』も、皇子ジェムの命令により編纂された書であり、少なくともオスマン朝に関する部分には王家向けの内容が書かれた可能性がある。実際、両史料で語られる始祖エサウ説は、ともにエサウ裔の賞讃—その最たるは子孫が王とされている点であろう—と一緒に語られている。始祖ヤペテ説は、その子孫の権威を高めるような要素を含んでいなかった。それに対し、始祖エサウ説は、王家の権威を高める要素を内在した主張であった。よって始祖エサウ説は、王家の権威を高めたいと考える人々によって主張されたと考えられる。それ以上の結論、例えば始祖エサウ説の主張が王家主導であ

るか等は史料中からは導き出せないが、少なくともイスハーキー教団の影響は確認できない。件のハディースは引かれず、また「イサクの父」への言及もないからである。

3. 始祖エサウ説の広がり（16世紀初頭）

その始祖エサウ説は、15世紀末のネシュリーによって批判されるものの（III-1 参照）、16世紀初頭に広範な広がりを見せる。バヤズィト 2 世の治世後半、16世紀初頭に著された史書として、ルーヒー『ルーヒー史』（Rûhî, *Tevârih*, 12a）、ビトリスィー『八天国』（Bitlisî, *Heşt*, 33a）そしてケマル・パシャザーデ『ケマル・パシャザーデ史』（Kemâlpaşazâde, *Tevârih*, 39）の三書がある。これらは三書とも始祖エサウ説と始祖ヤペテ説を併記しているが、何れも前者をより強調して記述しているのである。すなわち、ルーヒーとビトリスィーは、『オックスフォード写本無名年代記』にある、前述したエサウの逸話を繰り返している。更にビトリスィーは、オスマン王家の始祖をエサウとするだけではなく、先に触れたようにオスマン王家を「イサクの民」（ヤペテ裔はこれに該当しない）であると述べている。ケマル・パシャザーデはエサウと、オグズ伝承に由来するオスマン王家の始祖であるカユが同一人物である説に触れた際に、これが「有名な話 *kavl-i eşher* と輝かしき語り *nakl-i ezher*」によるとしている。対して始祖ヤペテ説には簡単に言及するに留まっていることから、ケマル・パシャザーデは始祖エサウ説をより重視していたと見なしうる。

16世紀初頭に著された史書が全て始祖エサウ説を強調していることは、この時期始祖ヤペテ説よりも始祖エサウ説の方が広範に広まっていた、あるいは、⁽²⁹⁾ 広まって欲しいと考えられていたと見なしうる。さらに『八天国』と『ケマル・パシャザーデ史』は、バヤズィト 2 世の命令によって編まれた、いわば「公式」の史書である。それ故、この時期に始祖エサウ説を喧伝した（させた）主体は、当時のスルタンであるバヤズィト 2 世、あるいはバヤズィト 2 世の周辺に存在していた人々であったと考えられる。1480年代における始祖エサウ説を唱えた主体は明確ではなかったが、16世紀初頭における始祖エサウ説の主張は、王家主導である可能性が高い。

バヤズィト 2 世の治世は、対外的な躍進こそなかったものの、多くの史書が編纂され、歴史叙述が発展した時代である。メナージュによると、15世紀まで

の史書は「民衆文学 popular literature」であって、それ以降のビトリスィーとケマル・パシャザーデはオスマン朝歴史叙述の「転換点」であった。15世紀末で以前の時代の伝承を整理する段階が終わり、16世紀初頭には技巧的な文体で記された文学的な価値の高い史書が著されるようになったのである。⁽³⁰⁾ またイナルジュクは、マムルーク朝やイランとの抗争を通じてオスマン朝における歴史叙述の発展がもたらされ、そこでバヤズィト2世はムスリムの支配者として、預言者ムハンマドと正統カリフ以外は誰も比肩しえない存在であると主張された、と論じている (Inalcık, “The Rise,” 165-166)。こうした歴史叙述の再編が行われた時代において、「定説」に準じてはいたものの子孫に権威を付与することのなかった始祖ヤペテ説よりも、子孫が王となると予見された（しかもその「王」とは、ルームの帝王であるとも伝えられた）エサウを始祖とする説の方が、王家にとって採用するにより相応しい説と見なされたのであろう。

III. 始祖エサウ説への批判（15世紀末）と始祖ヤペテ説の復権（16世紀半ば以降）

1. 始祖エサウ説への批判（15世紀末）

前章では、始祖エサウ説が1480年代に主張され始め、16世紀初頭に大きな広がりを見せたことを論じたが、その始祖エサウ説に対し早くも15世紀末に反論を加えた史家がいた。史書『世界の鑑』を書いたネシュリーである。彼は始祖エサウ説を重視する『オックスフォード写本無名年代記』を主要史料の一つとして『世界の鑑』を書いたが、始祖エサウ説には賛同できなかったようである。ヤペテに遡る王統譜を語った後、ネシュリーは次のように言う。

〔オスマン王家が属するオグズ族の名祖である〕オグズ・ハンは、アブラハム—彼に神の平安あれ—の息子イサクの息子エサウの息子である、と〔ある者達は〕言う。間違えている。というのは、エサウはアスファル⁽³¹⁾ asfar であるルームの父祖 ata であり—すなわち第二のルーム Rûm-ı sâni である—、セムの息子アルパクシャドの子孫だからである。〔しかしオグズ・ハンに〕オグズとテュルクとモンゴルと第一のルーム Rûm-ı evvelî のように、ヤペテの子孫 evlâd であることが、諸史の書物で言及され、選ばれた諸史で語られているのである (Neşrî, *Kitâb*, Vol. 1, 56)。

「asfar」は「黄色い、青白い」の意味であり、ルームの人々（すなわちロー

マ人)を指すのに用いられた表現である。「アスファルの民 banû Asfar」という表現は、先行するイスラーム世界の史書において、ムスリムの敵手たるローマ人⁽³²⁾そしてキリスト教徒のことを指していた⁽³³⁾。また、「アスファルの民」は終末の時にムスリムと決戦を行う存在だとも考えられていた⁽³⁴⁾。ネシュリーにとって、宿敵「アスファルの民」とオスマン王家を同じ起源とするのは、認められないことだったのであろう。また、「第一のルーム」はヤペテの子孫のユナン(アレクサンドロスと彼に続く者達が想定されている)を、「第二のルーム」はエサウの子孫ルーム(ローマ人が想定されている)を指す際に用いられた表現である⁽³⁵⁾。これに従えば、ヤペテ裔であるオスマン王家と、エサウ裔である第二のルームは全く別の系譜に属しているのである。つまり、ネシュリーは先行する史書の見解に従い、始祖エサウ説を否定して、始祖ヤペテ説を改めて主張した。ネシュリーは、彼以前に始祖ヤペテ説を主張した史家達のように受動的に始祖ヤペテ説を採用したのではなく、先行する歴史叙述の文脈を正確に踏まえた上で、始祖ヤペテ説を主張するという立場を取ったのである。但しネシュリーによる批判にも拘わらず、16世紀初頭に始祖エサウ説が広く受容されたのは先に確認した通りである。特にビトリシーは、ネシュリーを主要史料の一つとして用いているが、始祖エサウ説批判には与せず、始祖エサウ説を重視している。ネシュリーによる批判は、16世紀初頭までの段階では影響力を持たなかったのである。

2. 始祖ヤペテ説の復権(16世紀半ば以降)

16世紀初頭に幅広く受け入れられた始祖エサウ説であるが、それ以降の史書ではどのような展開を見せるのか。バヤズィト2世を継いだセリム1世(r. 1512-1520)の時代には目立った歴史叙述は著されなかったが、セリムに続くスレイマン1世(r. 1520-1566)時代以降の史家達は全員がオスマン王家の系譜をヤペテにつなげている(対象時期の史料13点のうち、旧約聖書・イスラーム伝承起源に触れているものは8点で、この全てが始祖ヤペテ説を採用している)。16世紀初頭に広範な広がりを見せた始祖エサウ説は、16世紀半ば以降、始祖ヤペテ説に取って代わられるのである。

しかしこれらの史料において、始祖ヤペテやその子孫が権威を持つと主張された形跡は認められない。これは15世紀における始祖ヤペテ説の主張と同様で

ある。それではなぜ、ヤペテに始祖としての権威がないにも拘わらず、この時期始祖ヤペテ説は再び「定説」の地位を獲得したのだろうか。これらの史料のうち、公式史官「シャーナーメ詠み」を務めたロクマンによる『技の書』(1578年)では、ビトリシーを引用し始祖エサウ説に言及しつつも、「テュルク達 *etrâk* はヤペテ裔 *Âl-i Yâfes* であるのは有名である」と述べ、始祖ヤペテ説を強調している。また著名な文人アーリーによる『諸情報の精髓』(16世紀末)は、ネシュリーによる始祖エサウ批判を引用している (*Lokmân, Hüner*, 25a-25b; '*Âlî, Künh*, Vol. 5, 19)。このことは、16世紀初頭の段階でビトリシーに顧みられなかった、ムスリム歴史叙述における「定説」に則ると本来テュルクはヤペテ裔であるというネシュリーの主張が16世紀半ば以降受け入れられたことを示す。特にロクマンの著作は官選史書というべき性質のものであり、王家によっても「定説」に則った始祖ヤペテ説が受容されるようになったと見なしうる。

16世紀半ば以降、特にスレイマン1世の治世は、バヤズィト2世時代以上⁽³⁶⁾に歴史叙述が大きく発展した時代であった。この時代には、政治や司法の分野、あるいは建築や芸術の分野において「正統的な」イスラーム的価値観が追求されたことが指摘されており、歴史叙述においてもこうした潮流が影響を与えた可能性⁽³⁷⁾がある。こうした状況下においては、始祖やその子孫に権威はあってもイスラーム世界の歴史叙述において「破格」である始祖エサウ説よりも、始祖やその子孫の権威はなくとも「定説」に則った始祖ヤペテ説が妥当である⁽³⁸⁾と見なされたのであろう。16世紀半ばから本稿の対象時期の下限である16世紀末までの間に、始祖エサウ説を肯定的に唱えた史家は殆ど存在しない。ここに始祖エサウ説は終わりを見るのである。

おわりに

本研究では、「旧約聖書・イスラーム伝承」に由来する、オスマン王家の二人の始祖ヤペテとエサウをめぐる諸説を分析し、その史学史的背景と展開を論じた。変遷の過程を要約すると、以下の通りとなる。

①オスマン朝の史家は当初より、イスラーム世界における歴史叙述の「定説」に従って始祖ヤペテ説を受容していた。ヤペテとその子孫についての評価は、特に言及されていない。②15世紀後半にはオスマン王家が「イサクの父の息子達」であるとする説がイスハーキー教団によって唱えられた。この説はハディ

ースに基づいており、またメフメト2世によるコンスタンティノーブル征服を契機としたものであった。この段階でも、始祖ヤペテ説同様、始祖の評価は主張されていない。③1480年代には、始祖エサウ説が登場する。始祖ヤペテ説と「イサクの父の息子達」説が始祖の持つ権威に無関心であったのに対し、始祖エサウ説ではエサウの子孫は王となるとされており、オスマン王家の権威が高められている。エサウ裔が王となるという説は先行するイスラーム世界の歴史叙述において確認することができ、オスマン王家始祖エサウ説で見られる同様の伝承は、その踏襲と位置づけることができる。④その始祖エサウ説は、16世紀初頭にバヤズィト2世（あるいはバヤズィト2世の周辺）の主導によって広範に主張されることとなる。バヤズィト2世の治世後半は歴史叙述の再編が行われた時代であり、その際に王家に高い権威をもたらす始祖エサウ説は、相応しい主張であると見なされたのであろう。⑤しかし16世紀半ば以降は始祖ヤペテ説が再び主流となる。これは、15世紀末のネシュリーの批判に既に確認されるように、権威はなくとも「定説」に基づいたヤペテが始祖として相応しいと考えられたためだといえる。

以上がヤペテとエサウをめぐる諸説の展開である。これらの諸説は様々な形で主張されたが、その内容の一部は、オスマン朝に先行して著された歴史叙述の文脈を受けてのものであった。すなわち全くの創作ではなく、既存の伝承を利用し、組み替えることによって主張されたのである。そして両説の変遷は、「イスラーム世界の歴史叙述における「定説」に則るが、始祖やその子孫は権威を持たない始祖ヤペテ説」と「イスラーム世界の歴史叙述における「定説」を逸脱するが、始祖やその子孫は権威を持つ始祖エサウ説」の相克、そして前者の最終的な勝利として描き出すことができる。本稿で扱ったオスマン王家始祖エサウ説の隆盛と衰退は、過去の歴史叙述がいかに読み替えられ始祖の主張に利用されたか、そしてその変遷についての、一つの歴史的事例を提示し得たといえよう。

オスマン王家の系譜的起源の主張には、本稿で取り扱った「旧約聖書・イスラーム伝承」以外にも、全く別系統の伝承であるオグズ伝承に由来する起源が存在し、こちらも系譜による王家の権威強化に大きな役割を果たした。またセルジューク朝やモンゴル諸王朝など先行諸王朝との系譜関係も、この時期に主張されている。これらを検討することにより、王家の系譜的起源の主張をより

立体的に把握することができると思われるが、この問題については稿を改めて
論ずることとしたい。⁽³⁹⁾

史料一覧：同一史料で複数のテキストを利用している場合、参照頁は目録で最初に挙げられたテキストのものである。テキスト間に特に大きな異同がない限り、それで代表させた。また写本の場合、二つめ以降に利用されたテキストは、著者名・表題を省略した。略号：BL: British Library, BN: Bibliothèque nationale de France, NK: Nuruosmaniye Kütüphanesi, SB: Staatsbibliothek zu Berlin, SK: Süleymaniye Kütüphanesi, TSMK: Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi.

I. オスマン朝で著された史料

Abû'l-'Abbâs, *Akhhârü'l-duvel*, BL, Or. 1548.

Ahmedî, *İskender-nâme*, ed. by İ. Ünver, Ankara, 1983.

'Âlî, *Künhü'l-Ahbâr*, 5 vols., Istanbul, 1277.

Anon., *Die altosmanischen anonymen Chroniken*, ed. by F. Giese, Part I, Breslau, 1922; BN, turc 98.

Anon., *Tevârih-i 'Âl-i 'Osmân*, ed. by H. E. Cengiz and Y. Yücel, *Belgeler*, 14/18 (1992), 359-472+facsimile. (『オックスフォード写本無名年代記』。誤って『ルーヒー史』として刊行された)

Anon., *Zuhûr-ı 'Âl-i 'Osmân*, Millet Kütüphanesi, Ali Emiri (Tarih) 189, 1159; SK, Fatih 4206, 5444, İbrahim 670, Tercüman 189.

'Âşıkpaşazâde, *Osmanoğulları'nın Tarihi*, ed. by K. Yavuz and M. A. Y. Saraç, Istanbul, 2003; *Tevârih-i 'Âl-i 'Osmân'dan 'Âşıkpaşazâde Ta'rîhi*, ed. by 'Âlî, Istanbul, 1332; *Die altosmanische Chronik des 'Âşıkpaşazâde*, ed. by F. Giese, Leipzig, 1929.

Bayâtî, *Câm-ı Cem-Âyîn*, K. Fahrettin (trans.), *Osmanlı Tarihleri*, Istanbul, 1949, 371-405; SB, Ms. or. oct. 1943.

Bitlîsî. *Heşt Bihişt*. TSMK, Hazine 1655; SK, Esad Efendi 2199.

Cenâbî. *Ta'rîh-i Cenâbî*. NK 3102.

Ebû'l-Fazl, *Nizâmü't-tevârih tercümesi*, BL, Add. 6020.

Ebû'l-Hayr Rûmî, *Saltuk-name*, 7 vols., ed. by F. İz, Cambridge, 1974-1977.

Enverî. *Fatih Devri Kaynaklarından Düstûrnâme-i Enverî*. Ed. N. Öztürk. Istanbul, 2003; İzmir Milli Kütüphane. 16144.

Evliyâ Çelebi, *Evliyâ Çelebi Seyahatnâmesi*, 10 vols., Istanbul, 1996-2007.

Hadidî, *Tevârih-i 'Âl-i Osman*, ed. by N. Öztürk, Istanbul, 1991.

Hoca Sa'de'd-dîn, *Tâcü't-tevârih*, 2 vols., Istanbul, 1280.

Karamânî, *Tevârihu's-selâtni'l-'Osmân*, SK, Ayasofya 3204; SK, Âşir Efendi 234.

Kemâl, XV. *Yüzyıl Tarihçilerinden Kemal Selâtn-nâme (1299-1490)*, ed. by N.

- Öztürk, Ankara, 2001.
- Kemâlpasazâde (İbn-i Kemal), *Tevârîh-i Âl-i Osman, I. defter*, ed. by Ş. Turan, Ankara, 1991.
- Konevî, *Ta'rih-i 'Al-i 'Osmân*, Kayseri Umumî Kütüphanesi, 956.07; BN, persan 528.
- Lârî, *Mir'âtü'l-edvâr*, SK, Ayasofya 2085.
- Lokmân, *Hüner-nâme*, TSMK, Hazine 1523.
- Lütfî Paşa, *Lütfî Paşa ve Tevarih-i Al-i Osman*, ed. by K. Atik, Ankara, 2001.
- Nasûh, *Mecma'ü't-tevârîh*, SK, Fatih 4278.
- Neşrî, *Kitâb-ı Cihan-nümâ*, ed. by F. R. Unat and M. A. Köymen, 2 vols., Ankara, 1951-1955; *Ğihānnümā*, Vol. 2., ed. by F. Taeschner, Leipzig, 1951; BN, turc 54.
- Nişancı, *Ta'rîh-i Nişancı*, Istanbul, 1279.
- Oruç, *Die frühosmanischen Jahrbücher des Urudsch*, ed. by F. Babinger, Hannover, 1925; *Oruç Beğ Tarihi*, ed. by Atsız, n. d. (1972?); BN, turc supplément 1047.
- 'Osmân, *Tevârîh-i Cedîd-i Mir'ât-ı Cihân*, ed. by Atsız, Istanbul, 1961.
- Rıdvân, "Ahmed Rıdvân'ın İskender-namesindeki Osmanlı Tarihi Bölümü," ed. by İ. Ünver, *Turkoloji Dergisi* 8 (1979), 345-402.
- Rûhî, *Tevârîh-i Âl-i 'Osmân*, SB, Ms. or. quart 821.
- Şirvanlı Mahmûd, *Târih-i İbn-i Kesîr Tercümesi*, ed. by M. Yelten, Ankara, 1998.
- Şükrullâh, *Behcetü't-tevârîh*, NK 3059.
- Yazıcıoğlu Ahmed, *Dürr-i Meknun*, ed. by N. Sakaoğlu, Istanbul, 1999.
- Yazıcıoğlu 'Alî, *Ta'rîh-i Âl-i Selcûk*, TSMK, Revan 1391, 1390; SB, Ms. or. quart. 1823.
- Za'im, *Câmi'ü't-tevârîh*, TSMK, Revan 1382.
- II. オスマン朝以外で著された史料
- Abû al-Fidâ, *Mukhtaşar fî Akhbâr al-Bashar*, ed. by M. Dayyûb, 2 vols., Beirut, 1997.
- Anon., *Mujmal al-Tawârikh wa al-Qiṣaṣ*, ed. by M. Sh. Bahār, Tehran, 1318.
- Banâkatî, *Ta'rîkh-i Banâkatî*, ed. by J. Shi'âr, Tehran, 1378.
- Baydâwî, *Nizâm al-Tawârikh*, ed. by M. H. Muḥaddith, Tehran, 1381.
- Ibn al-Athîr, *al-Kâmil fî al-Ta'rîkh*, ed. by C. J. Tornberg, 12 vols., Beirut, 1965-1966².
- Ibn al-Jawzî, *al-Muntazam fî Ta'rîkh*, 16 vols, ed. by M. 'A. 'Aṭā, Beirut, 1992.
- Ibn 'Inaba, *al-Fuṣūl al-Fakhrîya*, ed. by K. Mūsawî and J. M. Urmawî. Tehran, 1363.
- Ibn Kathîr, *al-Bidāya wa al-Nihāya*, ed. by A. M. Aḥmad et al., 14 vols., Beirut, 1987-1988.
- Ibn Khaldûn, *Kitâb al-'Ibar*, 7 vols., Beirut, 1992.
- Jāḥiz, *Rasā'il al-Jāḥiz*, Cairo, 1933.
- Jūzjānî, *Ṭabaqāt-i Nāṣirî*, 2 vols., ed. by 'A. Ḥabîbî, Tehran, 1963².
- Khwānd-Amîr, *Ta'rîkh-i Ḥabîb al-Siyar*, 4 vols., ed. by J. Humā'î and M. Dabîr-Siyāqî,

- Tehran, 1333.
- Kisā'ī, *Vita prophetarum*, ed. by I. Eisenberg, Leiden, 1922.
- Maçoudi, *Les prairies d'or*, 9 vols., ed. by C. B. de Meynard and P. de Courteille, Paris, 1861-1930.
- Mir-Khwānd, *Rawḍat al-Ṣafā*, ed. by J. Kiyānfur, 15 vols., Tehran, 1380.
- Muslim, *Kitāb Ṣaḥīḥ*, Cairo, 1327-1328 (磯崎定基他訳『日訳サヒーフムスリム』全3巻, 日本ムスリム協会, 1987-1989 [『真正集』]).
- Mustawfī, *Ta'riḫ-i Guzīda*, ed. by 'A. Nawāyī, Tehran, 1339.
- Nishāpūrī, *Qīṣaṣ al-Anbiyā'*, ed. by Ḥ. Yaghmā'ī, Tehran, 1961.
- Rabgūzi, *Qīṣaṣū'l-Enbiyā*, Vol. 1, ed. by A. Ata, Ankara, 1997.
- Rashid al-Dīn, *Jāmi' al-Tawārīḫ*, 3 vols., ed. by 'A. 'A. 'Alī-Zāda, Moscow and Baku, 1957-1980.
- Shabānkārā'ī, *Majma' al-Ansāb*, 2 vols., ed. by M. H. Muḥaddith, Tehran, 1363-1381.
- Sibt, *al-Sifr al-awwal min Mir'āt al-Zamā fi Ta'riḫ al-A'yān*, ed. by I. 'Abbās, Beirut, 1985.
- Ṭabarī, *Ta'riḫ al-Rusul wa al-Mulūk*, 15 vols., Leiden, 1879-1901.
- Tha'labī, *Qīṣaṣ al-Anbiyā*, Beirut, 1985.
- Walī al-Dīn (al-Ḥusayn ibn Muḥammad Ṭībī), *Sharḥ al-Ṭībī 'alā Mishkāṭ al-Maṣābīḥ*, 12 vols., ed. by A. 'A. M. 'A. Samak, Beirut, 2001.
- Ya'qūbī, *Ta'riḫ al-Ya'qūbī*, 2 vols., Beirut, 1992.

注

- (1) ムスリムの歴史叙述において、ユダヤ教、キリスト教から伝わった伝承はイスラエーリヤートと呼ばれた (G. Vajda, "Isrā'iliyyāt," *EP*, Vol. 4, 1978, 211-212)。そのうち、本稿で対象とする旧約聖書由来の伝承は、クルアーンやハディースでは断片的に見られるに過ぎない (それ故, 「旧約聖書・クルアーン伝承」という呼び方はここではない)。より包括的に旧約聖書に由来する伝承を伝えるのは、世界史書の諸預言者の部分や預言者伝においてである。
- (2) ペルシア人については、セム裔説とヤペテ裔説がある。ペルシア人のヤペテ裔説の例として Ṭabarī, *Ta'riḫ*, Vol. 1, 216, セム裔説の例として Ṭabarī, *Ta'riḫ*, Vol. 1, 223。
- (3) モンゴルについては宇野伸浩『『集史』の構成における「オグズ・カガン説話」の意味』『東洋史研究』61/1(2002), 44-48, アク・コムンル朝については北川誠一「モンゴルとイスラーム」『大モンゴルの時代』中央公論社, 1997, 411-417。
- (4) B. Flemming, "Political Genealogies in the Sixteenth Century," *Osmanlı Araştırmaları*, 7-8(1988), 123-137. 『オックスフォード写本無名年代記』(Anon., *Tevârīḥ*), 『世界の鑑』(Neşrī, *Kitāb*) 『八天国』(Bitlīsī, *Heşt*) 『諸情報の精髓』('Âlī,

- Künh) に含まれるエサウ関係の情報を提示している。
- (5) S. Yerasimos, *La fondation de Constantinople et de Sainte-Sophie*, Paris, 1990, 193-199.
- (6) 代表的な論集として, H. T. Karateke and M. Reinkowski (eds.), *Legitimizing the Order*, Leiden and Boston, 2005.
- (7) 16世紀末までをオスマン朝の古典期とすることについては, 鈴木董『オスマン帝国の権力とエリート』東京大学出版会, 1993, 75-77.
- (8) B. Heller and A. Rippin, “Yāfith,” *EP*, Vol. 11, 2002, 236-237.
- (9) オスマン朝史を取り扱った諸史書では, 多くの場合冒頭に「某の息子某, その息子某……」という形で, オスマンに始まりノアまで遡る王家の系譜が記されている。本稿では, これを「王統譜」と呼ぶ。
- (10) テュルク族をセム裔とする説も, 僅かだが確認することができる。ジャーヒズは, テュルク族は預言者アブラハムの子孫であるとし (Jāhiz, *Rasā'il*, 64), イブン・イナバも同様の伝承を伝える (Ibn 'Inaba, *Fuṣūl*, 12)。但しいわゆる歴史書においてはテュルク族がヤペテ裔という見解は共有されており, テュルク族をセム裔とする考えはあくまで例外といえる。
- (11) タバリーの他に, ヤペテ裔に良き者はいないとした史家にはイブン・カスィールがいる (Kathir, *Bidāya*, Vol. 1, 108)。またタバリーは, ヤペテの子孫から王が生まれるようノアが祈ったとも伝える (Ṭabari, *Ta'rikh*, Vol. 1, 215)。キサーイーはヤペテ裔から王が現れるとしている (Kisā'i, *Vita*, 99) が, 暴君 jabābira も現れるとするため, 肯定・否定の両面を含んでいるとみなしうる。他にはノアが, ヤペテ裔が地に満ちるよう祝福を与えたという説もある (Maṣṣūdī, *prairies*, Vol. 1, 76; Sibṭī, *Mir'āt*, 245)。
- (12) オスマン王家がその出自とするオグズ族は, 同時にテュルク族と見なされているが (例えば Yazıcıoğlu 'Alī, *Ta'rikh*, 2b), 何れの史料にも, 「テュルク」という人名はオスマン王家の系譜上に現れない。これは, オスマン朝で著された史書における王家の系譜のノアからオグズ・ハンまでの部分が, 『集史』を基にしていることに由来すると考えられる。
- (13) G. D. Cohen, “Esau as Symbol in Early Medieval Thought,” *Jewish Medieval and Renaissance Studies*, Cambridge, 1967, 19-30.
- (14) F. Babinger, “Vorwort”, Oruç, *Die frühosmanischen Jahrbücher des Urudsch*, Hannover, 1925, xiv. オックスフォード写本は 1467/8 年までの事件を含み, 書写年は 17世紀前半とされる。
- (15) バガウィー『言行の灯火』の注釈であるワリーユッディーン (d. 1342)『灯火の壁龕』のこと。すぐ後で見るコンスタンティノープル征服に関する『真正集』のハディースを収録する (Walī al-Dīn, *Sharḥ*, Vol. 10, 83)。なお『灯火の壁龕』で収録されているハディースの内容は『真正集』と同一である。つまりハディースと『オルチ史』の違いは, 『灯火の壁龕』ではなく『オルチ史』の段階における変更である。

- (16) Oruç, *frühosmanischen*, 71. 『オルチ史』には異本が多く、この説を伝えるのはオックスフォード写本のみである。なおこの伝承は『ギーゼ校訂版無名年代記』でも確認できる (Anon., *altosmanischen*, 111)。
- (17) この町は、コンスタンティノープルのことを指している (M. Canard, “Les Expéditions des arabes contre Constantinople dans l’histoire et dans la Légende,” *Journal Asiatique*, 208 (1926), 109-110)。
- (18) 『オルチ史』では「イサクの父」、^{アフ・イスハーク}『真正集』では「イサクの民」という表記の違いがある。当然、本来は『真正集』が正しい。この変更についてはすぐ後で触れる。
- (19) Muslim, *Kitāb Ṣaḥīḥ*, Vol. 7, 330. 訳文は邦訳に従った (Vol. 3, 753. 一部語句のみ改変)。
- (20) カーザルーニー教団とも。開祖はシーラズ付近のカーザルーンで生まれたアフ・イスハーク (963-1033) をとする。アナトリアではブルサやコンヤなどを拠点とし、オスマン朝の聖戦に従事した (H. Algar, “Kāzarūnī,” *EP*, Vol. 4, 851)。オスマン朝では、16世紀にナクシュバンディー教団などの台頭により、勢力を弱めた (M. F. Köprülü, “Abū Ishāq Kāzerūnī und die Ishāqī-Derwische in Anatolien,” *Der Islam*, 19 [1931], 24)。
- (21) この説とイスハーキー教団との関係については、ヴィテックによる先駆的な指摘がある (P. Wittek, “Zusatz d. Übersetzers,” in Köprülü, “Abū Ishāq,” 25)。
- (22) Ebū’l-Hayr, *Saltuk*, Vol. 4, 310a. なお、オスマンガルメリに渡った歴史的事実は確認されていない。
- (23) 『オックスフォード写本無名年代記』の記述における「トルキスタン」は、この後オスマン朝の祖先がタタールに追われてアフラト (東アナトリアの町) に移住する、という記述が続くことから、いわゆる歴史的トルキスタン (マー・ワラー・アン＝ナフルとその北に位置するステップ地域を指す。W. Barthold and C. E. Bosworth, “Turkistān,” *EP*, Vol. 10, 579) であると見てよい。なお、先行するイスラーム世界の史書の多くでは、エサウはルーム地方 (この場合はアナトリア) に移住することになっている (例えば Tha’labī, *Qīṣaṣ*, 102)。「トルキスタン」の語が指し示す空間の歴史の変遷については、木村暁「中央アジアとイラン：史料に見る地域認識」宇山智彦(編)『地域認識論：多民族空間の構造と表象』講談社、2008、39-72 を参照。
- (24) Flemming, “Political,” 137. フレミングは16世紀末のアーリーの記述における同様の説 (オスマン王家始祖エサウ説の部分ではなく預言者伝でのイサクの逸話の部分で語られている) について触れているが、情報源には言及していない。
- (25) この説がイスラーム世界に独自のものか、或いは既にユダヤ・キリスト教の伝承の中に存在したのかについては今後の課題としたい。一点のみ触れると、エサウに与えられた祝福「お前は自分の剣に生き、お前の弟に仕えよう。だが、お前がさまよい出るときがあるだろう。お前は自分の項から彼の軛を振り解くだろう」(創 27: 40. 訳文は月本昭男訳『創世記』岩波書店、1997、86より) のなかの「剣に生き」という表

現が、イスラーム世界の歴史叙述における「エサウ裔が王となる」という解釈につながった可能性があるのではないかとと思われる。

- (26) H. Inalcık, “The Rise of Ottoman Historiography,” in B. Lewis and P. M. Holt (eds.), *Historians of Middle East*, London, 1962, 156. この段階での「ルーム」は、地名として用いられていたと考えられる。なおルーム・セルジューク朝も同称号を使用している。
- (27) S. Özbaran, *Bir Osmanlı Kimliği*, Istanbul, 2004, 73.
- (28) 「ルームのスルタン」としてのオスマン朝君主に焦点を当てた論文として、P. Wittek, “Le Sultan de Rûm,” *Annuaire de l’Institut de philologie et d’histoire orientales*, 6 (1938), 361–390.
- (29) 勿論、始祖エサウ説を強調するこの三書においても始祖ヤベテ説が言及されていることは、始祖ヤベテ説が根強く定着しており、無視され得なかったことを示しているよう。
- (30) V. L. Ménage, “The Beginnings of Ottoman Historiography,” *Historians of the Middle East*, 168.
- (31) Unat と Köymen 編のテキストでは asgar と翻刻されているが、Taeschner 編テキストに所収のファクシミリでは asfar と asgar と読み (1:19, 2:23), BN 写本では asgar と読める (23b)。最終的な結論を出すには他の写本も検討する必要があるが、多くのムスリム史書において「アスファルの民」がエサウ裔であるとされていることから、asfar が正しいと思われる。
- (32) アスファルの民への敵愾心はエンヴェリーが随所で伝える (Enverî, *Düstûr*, 54, 62, 64, 66, 68)。
- (33) Ṭabarî, *Ta’riḫ*, Vol. 1, 357; Tha’labî, *musammâ*, 102 など。タバリーはルーム（この場合は「ローマ人」のこと）をヤベテの子孫とする説も紹介している (Ṭabarî, *Ta’riḫ*, Vol. 1, 219, 222) が、(表2)「エサウの子孫」欄からわかるように、ルーム(「ローマ人」あるいはその名祖たる人物ルーム)をエサウの子孫(息子)と見なす説の方が一般的であった。
- (34) アフマド・イブン・ハンバル (780–855) の『ムスナド』で伝えられるハディースでは、終末の指標として「アスファルの民」とムスリムの間の戦いが挙げられている (Yerasimos, *foundation*, 190)。15世紀半ばにオスマン朝で著された終末論的著作『隠された真珠』でも「アスファルの民」は破滅のイメージとともに語られている (Yazıcıoğlu Ahmed, *Dürr*, 123–125)。
- (35) ムラト 2 世時代にマムルーク朝史家イブン・カスィールの世界史書がオスマン語訳されているが、そこにこの記述が見られる (Şirvanlı Mahmûd [trans.], *Târiḫ-i İbn-i Kesîr Tercümesi*, M. Yelten [ed.], Ankara, 1998, 203, 253)。但しアラビア語原典には「第二のルーム」という表現はみられない (Kathîr, *Bidāya* 1/181)。「第二のルーム」という表現は翻訳者による解釈の結果である可能性がある。この表現がオスマン朝独

自のものか否かの判断は今後の検討課題としたい。

- (36) スレイマン1世時代における歴史叙述については、A. Özcan, “Historiography in the Reign of Süleyman the Magnificent,” *The Ottoman Empire in the Reign of Süleyman the Magnificent*, Vol. 2, Ankara, 1988, 167-222 が包括的に取り扱っている。
- (37) C. Imber, “Ideals and Legitimation in Early Ottoman History,” *Süleyman the Magnificent and His Age*, 1995, 148, 151; G. Necipoğlu, “A Kânûn for the State, A Canon for the Arts,” *Soliman le magnifique et son temps*, Paris, 1991, 198, 202.
- (38) 16世紀半ば以降、例外的にオスマン王家エサウ（セム）起源説を唱えた事例を紹介しておく。16世紀後半に筆写されたと推測されている（E. Bloche, *Catalogue des manuscrits turcs de la Bibliothèque nationale*, Vol. 1, Paris, 1932, 40）『ギーゼ校訂版無名年代記』の一写本（BN, turc 98）は、オスマン王家がセムの血筋であることを伝える（始祖ヤペテ説も併記するが、セムからオスマンに連なる者はみな帝王としてセムの血筋を強調している）。また、イル・ハン朝史家バイダーウィーのペルシア語世界史書『歴史の秩序』が、スレイマン1世時代にオスマン語訳されている。訳書にはオスマン朝史の章が付け加えられているのだが、そこでは始祖エサウ説が伝えられている（Ebû'l-Fazl, *Nizâm*, 54a）。訳者はビトリスィーの息子であり、そのためビトリスィーの伝える始祖エサウ説を踏襲したのであろう。17世紀の旅行家エヴリヤ・チェレビ『旅行記』も、オスマン王家をエサウの子孫と言及している。更にエヴリヤは、エサウをヤペテ裔とする伝承も伝えている（Evliya, *Seyahatnâmesi*, Vol. 3, 16）。すなわち、ここでは「始祖ヤペテ説」と「始祖エサウ説」が一つの系譜の中に融合しているのである。このような系譜を伝える史料は管見の限り他には存在しないが、相容れない筈の複数の始祖を一つに取り込んだ、貴重な事例といえる。
- (39) 特にオグズ伝承に由来するオスマン王家の始祖であるカユは、エサウと同一視されることもあった点で、本稿の主題と関連する。先行王朝との系譜意識については拙稿「古典期オスマン朝史書に見えるセルジューク朝との系譜意識」『東洋学報』89/2（2008）、「オスマン朝における歴史叙述のなかのモンゴル像」『イスラム世界』71（2008）を参照（掲載決定）。

付記：本研究は、文部科学省科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による成果の一部である。

表1 オスマン朝で著された史料※1における始祖やペテ説と始祖エサウ説

著者名、書名	成立	使用言語	経歴	献呈先	史書のタイプ	始祖やペテ説	始祖エサウ説
アフメディー Ahmedî 『アレクサンドロスの手紙』 <i>İskender-nâme</i>	1410年	オスマン語	諸君侯国に 仕えた詩人	皇子スレイマン	世界史	×	×
ヤズジュオール Yazıcıoğlu 『セルジュク王家史』 <i>Ta'rih-i 'Âl-i Selçuk</i>	1424年	オスマン語	書記	ムラト二世?	オグズ伝承, セル ジュク朝, イル・ハーン朝	○[4b]	×
シュクルラー Şükrullâh 『諸史の光輝』 <i>Behcetü't-tevârih</i>	1459年	ペルシア語	ウラマー	大宰相マフムト	世界史	○[158b]	×
エンヴェリー Enverî 『訓命の書』 <i>Düstûrnâme</i>	1465年	オスマン語	ウラマー	大宰相マフムト	世界史	×	×
カラマニー Karamânî 『カラマニー史』 <i>Tevârih-i's-selâtni'l-'Osmân</i>	1480年	アラビア語	大宰相	不明	オスマン朝史	○[1b]	×
エブールハイル Ebû'l-Hayr 『サルトゥクの書』 <i>Saltuk-nâme</i>	1480年頃	オスマン語	不明	皇子ジェム	特殊 (説話集)	×	○[310a]
バヤーティー Bayâtî 『ジェムの酒宴杯』 <i>Câm-i Cem-Âyîn</i>	1482年	オスマン語	元アク・コユン ル朝に仕える	皇子ジェム (但し 現存するのは後 に書き直したもの)	特殊 (系譜)	○[382]	×
著者不明 Anon. 『オックスフォード写本無名年代記』 <i>Tevârih-i 'Âl-i 'Osmân</i>	1480年代	オスマン語	書記?	バヤズィト二世	オスマン朝史	△ (始祖エサウ説と 併記, 始祖エサウ説 を重視) [375]	○[375]
ルドヴァーン Ridvân 『アレクサンドロスの手紙』 <i>İskender-nâme</i>	15世紀末	オスマン語	不明	不明	世界史	×	×
オルチ Oruç 『オルチ史』 <i>Tevârih-i 'Âl-i 'Osmân</i>	15世紀後半	オスマン語	エディルネ出身	不明	オスマン朝史	△[4] (「イサク の父の息子達」説 と併記)	△[71] (「イサ クの父の息子達」 説)

アーシュク・パシヤザーデ ‘Âşikpaşazâde 『アーシュク・パシヤザーデ史 Tevârîh-i ‘Âl-i ‘Osmân』	15世紀末	オスマン語	デルヴィシュ	不明	オスマン朝史	○[321]	×
ケマル Kemâl 『スルタン達 の書 Selâtn-nâme』	1490年頃	オスマン語	不明	バヤズィト二世	オスマン朝史	○[24]	×
コネヴィー Konevî 『コネヴィー 一史 Ta’rîh-i ‘Âl-i ‘Osmân』 著者不明 Anon.	15世紀末	ペルシア語	コンヤ出身	バヤズィト二世	オスマン朝史	○[5b]	×
『ギーゼ校訂版無名年代記 Tevârîh-i ‘Âl-i ‘Osmân』	15世紀末	オスマン語	不明	不明	オスマン朝史	△[4] (『イサクの父の息子達』説と併記)	△[111] (『イサクの父の息子達』説)
ネシュリー Nesrî 『世界の 鑑 Kitâb-ı Cihân-nümâ』	1485-1494年 の間	オスマン語	ブルサの ウラマー	バヤズィト二世?	オグズ伝承, セル ジューク朝, オス マン朝	○[1/56]	×
ルーヒー Rûhî 『ルーヒー一史 Tevârîh-i ‘Âl-i Osman』	16世紀初頭	オスマン語	エディルネ出身	バヤズィト二世?	オスマン朝史	△ (エサウ説と併記, エサウを重視) [12a]	○[12a]
ケマル・パシヤザーデ Kemâlpasazade 『ケマル・パシヤザーデ史 Tevârîh-i ‘Âl-i ‘Osmân』	16世紀初頭	オスマン語	ウラマー	バヤズィト二世, セリム一世	オスマン朝史	△ (エサウ説と併記, エサウ説を重視) [39]	○[39]
ビトリスィー Bitlisi 『八天国 Heşt Bihîşt』 著者不明 Anon.	16世紀初頭	ペルシア語	元アク・コユンル 朝に仕える	バヤズィト二世, セリム一世	オスマン朝史	△ (エサウ説と併記, エサウ説を重視) [33a]	○[33a]
『オスマン王家の登場 Zuhûr-ı ‘Âl-i ‘Osmân』	スレイマン 一世時代	オスマン語	不明	不明	オスマン朝史	×	×
ハデイーデー Hadîdî 『ハデイーデー一史 Tevârîh-i ‘Âl-i ‘Osmân』	1523-1530/1 年の間	オスマン語	ハテイーブなど	スレイマン一世?	オスマン朝史	×	×
ナスーフ Nasûh 『諸史集成 Mecma’ü’l-tevârîh』	16世紀半ば	オスマン語	デヴシルメで 宮廷へ	スレイマン一世	世界史	○*2	×

ニシヤンジュ Nişanci 『ニシヤンジュ史 Ta'rih-i Nişanci』	1562年以降	オスマン語	ニシヤンジュ	不明	世界史	○[87]	×
ルトフイー Lütüfî ルトフイー 1553-1563年 史 Tevârih-i Âli 'Osmân の間	1553-1563年 の間	オスマン語	大宰相	不明	オスマン朝史	×	×
ラーリー Lârî 『諸時代の鏡 Mir'âtü'l-edvâr』	1566年頃	ペルシア語	イラン出身の 文人	不明	世界史	×	×
ホジャ・サデーディン Hoca Sa'de'd-dîn 『諸史の王冠 Tâcüt-tevârih』	1575年	オスマン語	ウラマー	大宰相ソコルル?	オスマン朝史	○[1/15]	×
ザイーム Za'im 『集史 Câmi'u'l-tevârih』	1578年頃	オスマン語	ゼアーメト 保持者	大宰相ソコルル	世界史	○[197a]	×
ロクマン Lokmân 『技の書 Hüner-nâme』	1578年	オスマン語	シャナーメ 詠み	ムラト三世	オスマン朝史	○[25a-25b]	△[25a-25b] (両 説併記, ヤペテ説 を重視)
ジュナービー Cenâbî ナービー史 Ta'rih-i Cenâbî オスマン 'Osmân 鏡新史 Tevârih-i Cedtd-i Mir'ât-i Cihân アブールアッバース Abd'ul-'Abbâs 『諸国の諸情報 Akhhârü'l-duvel』	1588年頃 1591年 1598/9年	アラビア語 オスマン語 アラビア語	ウラマー 不明 不明	不明 不明 不明	世界史 世界史 世界史	○[269b] ○[12] ×	×
アーリー 'Âlî 『諸情報の精髄 Künhü'l-Ahbâr』	16世紀末	オスマン語	書記	不明	世界史	○[5/19]	△[5/19] (両説 併記, ヤペテ説を 重視)

※ 1 オスマン朝で著された史料としては、本稿の対象時期である15世紀初頭から16世紀末までの世界史、および初期オスマン朝史（オスマン朝建国前
後の時代）を扱った歴史書を、可能な限り網羅的に利用した。

※ 2 『諸史集成』にはないが、その抜粋とされる『ルステム史』には記述されている（Oesterreichische Nationalbibliothek, Mxt.. 339, 91b）。

表 2 オスマン朝以外で著された史料*3におけるテュルク族の始祖と、ヤベテ・セム・エサウの評価と子孫

著者、著作	成立	使用言語	活動した王朝	テュルク族の始祖	ヤベテと子孫の評価	セムと子孫の評価	エサウの子孫	イサクによる、エサウの子孫のための祈願
ヤークービー Ya'qūbi『ヤークービー史 <i>Ta'rikh al-Ya'qūbi</i> 』	872-897年の間	アラビア語	アッバース朝	ヤベテ [1/13]	特になし	特になし	特になし	特になし
タバリー Tabarī 『諸使徒と諸王の歴史 <i>Ta'rikh al-Rusul wa al-Mulūk</i> 』	923年以前	アラビア語	アッバース朝	ヤベテ [1/216]	王 [1/215] 子孫に良き者なし [1/223]	子孫は預言者 [1/215] 良き者 [1/223]	息子がルーム、そこからアスファルの民が現れる [1/354]	子孫の増加。他の者に支配されない [1/359]
マスウデーイー Mas'ūdī『黄金の牧場 <i>Muruj al-Dhahab</i> 』	956年以前	アラビア語	アッバース朝	ヤベテ [3/66]	子孫の増加 [1/76]	祝福 [1/76]	四代後の子ガルーム [2/293]	子孫は王 [1/88]
サアラビー Tha'labī 『預言者伝 <i>Qīṣaṣ al-Anbiyā'</i> 』	1036年以前	アラビア語	アッバース朝	ヤベテ [61]	特になし	特になし	息子がルーム、そこからアスファルの民が現れる [102]	特になし
ニーシャープリー Nishāpūrī『預言者伝 <i>Qīṣaṣ al-Anbiyā'</i> 』	H.5c	ペルシア語	不明	ヤベテ [39]	子孫のテュルク達を賞讃 [39]	子孫アジャムとファールスの民を賞讃 [39]	特になし	特になし
著者不明『史話要説 <i>Muḥmal al-Tawārīkh wa al-Qīṣaṣ</i> 』	1126年	ペルシア語	ガズナ朝	ヤベテ [98]	ヤベテの息子テュルクとハバザルを賞讃 [99-100] ヤベテはハムと共に呪われる [186]	子孫は預言者、帝王 [186]	ルームへ向かい、そこで子孫が増加。ルームの帝王 [195]	特になし
イブン・ジャウジー Ibn al-Jawzī『正しき秩序 <i>al-Muntazam</i> 』	1179年以降	アラビア語	アッバース朝	ヤベテ [1/249]	特になし	子孫は預言者、良き者 [1/248]	息子がルーム、そこからアスファルの民が現れる [1/309]	特になし

キサーイー Kisā'i 『預言者伝 Qisas al-Anbiyā』	1200年以前	アラビア語	不明	ヤベテ [101]	子孫は王，暴君， キスラー [99]	子孫は預言者 [99]	息子がアスファ ルとルーム [154]	特になし
イブン・アスィール Ibn al-Athīr『完史 al- Kāmil fi al-Ta'rikh』	1231年以降	アラビア語	ザンギー朝	ヤベテ [1/78]	特になし	特になし	息子がルーム， そこからアスフ アルの民が現れ る [1/126]	特になし
スィプト Sibṭ 『時代の鏡 Mir'at al-Zamān』	1256年	アラビア語	アイユー ブ朝他	ヤベテ [245]	子孫の増加 [245]	祝福。子孫は預 言者 [245]	息子がルーム， そこからアス ファルの民が現 れる [314]	子孫の増加。他 の者に支配され ない [314]
ジューズジャニー Juzjānī『ナセル史 Ṭabaqāt-i Nāsiri』	1260年	ペルシア語	グール朝他	ヤベテ [18]	特になし	特になし	ルームのテュル ク族と，アジャ ムの帝王はエサ ウの子孫 [28]	特になし
バイダーウイー Baydāwī『諸史の 秩序 Nizām al-Tawārīkh』	1275年	ペルシア語	イル・ハン 朝	特になし	特になし	特になし	特になし	特になし
ラシードウッディーン Rashīd al-Dīn 『集史 Jami' al-Tawārīkh』	1310年	ペルシア語	イル・ハン 朝	ヤベテ [1b]	特になし	特になし	アスファルの民， カエサルがエサ ウの子孫 [5b]	特になし
ラフグーズイー Rabgūzi『預言者 伝 Kisaṣi'l-Enbiyā』	1310年	テュルク語	チャガタイ ・ハン朝	ヤベテ [38]	ヤベテの息子テュ ルクを賞讃 [38]	特になし	特になし	特になし
バナークァー Banākātī『バナ ークァー史 Ta'rikh-i Banākātī』	1317年	ペルシア語	イル・ハン 朝	ヤベテ [11]	ヤベテの息子テュル クを賞讃，セムとヤ ベテの血筋とする [11]	特になし	特になし	特になし
アブールファイダー Abū al-Fida『人類史 要約 Mukhtasar fi Akhbār al-Bashar』	1329年以降	アラビア語	マムルーク 朝	ヤベテ [1/10]	特になし	特になし	特になし	特になし

ムスタウフィー Mustawfi『選史 Ta'rikh-i Guzida』	1330年	ペルシア語	イル・ハン朝	ヤベテ	[26]	特になし	一説ではセムは 預言者 [24]	特になし	特になし
イブン・カスィール Ibn Kathir『始まり と終わり al-Bidayā wa al-Nihāya』	1373年以前	アラビア語	マムルーク 朝	ヤベテ	[1/108]	子孫は良くない者 [1/108]	子孫は良き者 [1/108]	ルームはエサウ の子孫 [1/180]	子孫と糧の増加 [1/181]
イブン・ハルドゥー ン Ibn Khaldūn『教 訓の書 Kitāb al-'Ibar』	1377年	アラビア語	マムルーク 朝	ヤベテ	[2/10]	特になし	特になし	エドムの民, ア スファールの民, ルームのカエサ ルなどがエサウ の子孫[2/49-50]	特になし
イブン・イナバ Ibn 'Inaba『營れある諸 部 al-Fusūl al-Fakhrīya』	1405-1447年 の間	ペルシア語	ティムール 朝他	ヤベテ	[12]	特になし	子孫は預言者 [23]	ルームはエサウ の子孫 (ヤベテ 説あり) [21-22, 58-59]	特になし
ミールホーンド Mir-Khwānd 『清浄園 Rawdat al-ṣafā』	1498年	ペルシア語	ティムール 朝	ヤベテ	[1/81]	一説ではヤベテは 預言者。ヤベテの息 子テュルクを賞讃 [1/80-81]	一説ではセム は預言者 [1/85]	息子ルーム。 そこからアスフ アルの民, ルー ムの王が現れる [1/184]	子孫の増加。子 孫から王, スル タン, 預言者ヨ ブ [1/177]
ホーシデミール Khwānd-Amīr 『伝記の伴侶 Ta'rikh-i Ḥabīb al-Siyar』	1529年	ペルシア語	ムガル朝 他	ヤベテ	[3/5]	一説では預言者。ヤ ベテの息子テュル クを賞讃 [3/5]	一説ではセム は預言者。ノア の他の子より も卓越 [1/32]	ルーム, カエサ ル, アスファル の民はエサウの 子孫[1/59]ルー ムのスルタンは エサウの子ルー ムから [1/208]	子孫の増加。子 孫から王 [1/59]

※ 3 オスマン朝以外で著された史料については、まず歴史書としては森本公誠他『アジア歴史研究入門 4』（同朋社, 1984）で言及されている世界史書を、預言者伝としては最も良く読まれたとされるキサーイーによる『預言者伝』など四作品を、系譜学の書では代表的なイブン・イナバ『營れある諸部』を用いた。むろんオスマン朝以外で著された諸史書にみられるヤベテとその子孫、およびエサウとその子孫についての扱いを十全に明らかにするには、これだけでは不足なのは言うまでもないが、本稿の目的たるオスマン朝の史書で扱われる「旧約聖書・イスラーム伝承」起源を明らかにするための前提として検討する限りにおいては十分と考える。

【ノアからエサウまでの系図】